

【論文】

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文 —すでにあるできごとを描写する用法を中心に—

宮 部 真由美

A Study of Complex Sentences (*to* and *tara*) in Text
- Mainly concerning usage describing occurrences -

MIYABE, Mayumi

要旨：「～と」、「～たら」形式は、従属節に条件が述べられ、主節に話し手の推論や推測、予測が述べられるようないわゆる条件文だけでなく、すでにあるできごとを描写する場合にも用いられる。すでにあるできごとを描写する場合、＜きっかけ＞、＜連続＞、＜認識・発見の状況＞を表わす文に用いられるが、「～と」、「～たら」形式は用いられるテキストが異なる。そのことについて、小説から採集した用例を＜かたりのテキスト＞、＜話し合いのテキスト＞、＜内的独白＞とに分けて分析していく。さらに、＜日記のテキスト＞を加えて分析を行い、＜きっかけ＞、＜認識・発見の状況＞における「～と」形式と「～たら」形式とを使い分ける大きなポイントが、＜かたりのテキスト＞であるか、＜話し合いのテキスト＞であるかというテキストの違いと絡んで、＜文のかたりかた＞（かたりかた＝伝えかたの違い）と関係があることを述べる。

キーワード：「～と」形式、「～たら」形式、すでにあるできごとを描写する用法、テキストタイプ、文のかたりかた

1. はじめに

現代日本語において、代表的な条件表現形式として、「～と」、「～たら」、

「～ば」、「～なら」の4形式があげられる。これらの形式はそれぞれが部分的に重複する用法を持っており、先行研究ではそれらの共通点や違いについて論じたものが数多くある¹⁾。本稿で分析対象とする「～と」形式と「～たら」形式についても、どのような用法があり、どのような構文的な特徴があるのかということなどが明らかとなっている。しかし、そのような特徴を持つ「～と」形式や「～たら」形式が、「～ば」、「～なら」形式を含めた条件表現形式においてどのような位置づけにあるのかということについては、まだ議論の余地があるように思われる。筆者の最終的な目標は、「～と」形式、「～たら」形式が条件表現形式においてどのような位置づけにあるのかを示すことであるが、本稿では「～と」、「～たら」形式についても少し分析を深めておきたい。

今回の分析では、「～と」、「～たら」形式の文では表現できるが、「～ば」²⁾、「～なら」形式の文では表現できないすでにあるできごとを描写する場合の用法（<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>）を中心に、テキストの観点を取り入れて述べていくことにする。3. で述べる先行研究に指摘があるように、テキストの違いによって、「～と」、「～たら」形式の現れ方が異なる。どのように異なるのか、そしてこの違いはどのような違いであるのか論じたいと思う。

また、本稿に先行する研究である宮部真由美（2010）でも分析の対象とする文は、動詞の条件形でかつ、肯定形であった³⁾。本稿でもこれら、つまり、従属節に「～すると」、「～したら」の形をとる文について分析していく⁴⁾。

2. テキストのタイプ

宮部真由美（2010）でも、用例は主に小説から採集し、<会話文>と<地の文>とに分けて分析した。本稿でも同様にテキストタイプに分けて分析を進める。

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文―すでにあるできごとを描写する用法を中心に―
＜地の文＞には、物語世界のできごとを描写する部分と、作中人物の内的な意識が描かれる部分とに分けることができる。本稿では、物語世界のできごとを描写する部分である＜かたりのテキスト＞と、作中人物の内的な意識が描かれる部分である＜内的独白＞とに分けて分析していく⁵⁾。以下では、＜会話文＞を＜話し合いのテキスト＞、＜地の文＞の物語世界のできごとを描写する部分を＜かたりのテキスト＞、＜地の文＞の作中人物の内的な意識が描かれる部分を＜内的独白＞と呼んで分析を進めることにする。また、＜かたりのテキスト＞は三人称小説であるか、一人称小説であるかも考慮する。

日記体小説（『正義と微笑』太宰治）と個人の日記（『日記』五木寛之）とからも用例を採集した。これらは＜日記のテキスト＞と呼ぶこととする。

3. 先行研究

すでにあるできごとを描写する際の用法について論じているものに、蓮沼昭子（1993）がある。蓮沼昭子（1993）では「話し手の認識の実体験性」と「語りものにおける語り手の視点」という観点から、「～と」と「～たら」形式の違いが説明されており、「～と」形式は「前件の事態が成立した状況における、後件の事態の成立、あるいはそれに対する認識の成立を話し手が外部から観察者の視点で語るような場合」で、「～たら」形式は「前件の事態の成立した状況において、後件の事態を話し手が実体的に認識する場合」であると述べられている。蓮沼昭子（1993）にはテキストの違いに関しては明示的に述べられてはいないが、分析の観点も両形式の特徴も、テキストの違いという点が意識されたものであるといえる。なぜなら、すでにあるできごとを描写する場合に「話し手の認識の実体験性」から述べるということや、「語りものにおける語り手の視点」をどのようにとらえるかという観点は、＜話し合いのテキスト＞や＜かたりのテキスト＞というテキストの特徴を述べたものであるといえるからである。「～と」形式と「～

たら」形式の違いを上のようにとりだしたことは意義があるが、実際にはテキストの違いという点からの説明であるといえるだろう。

また、これまでの研究における用例は内省によるものも、実際に使われた用例を採集したものもある。蓮沼昭子（1993）の用例は内省と小説の地の文からのものであったが、中島悦子（2007）は自然談話から用例を採集し分析を行っている。また、中島悦子（2007）は自然談話録音資料から採集した用例の用法別の量的な分布を、国立国語研究所（1964）の現代雑誌九十種から得られた用例（※これらの用例は書きことばから採集されたものである）の分布と比較し、国立国語研究所（1964）では「『ト』が圧倒的に多く、『タラ』はそれに比べて少ない」p. 167ということ、自然談話では「『タラ』のほうが『ト』よりも4倍多く、・・・（途中省略）・・・自然談話の事実的条件（※筆者注：「事実的条件」は本稿のすでにあるできごとを描写する際の用法にあたる）では『タラ』が『ト』に代わって使われる傾向がある」p. 167ということを実証的に示している。

しかし、中島悦子（2007）は、「～と」形式と「～たら」形式の違いに関して、「『ト』は近接的な継起をその本質的な特徴」p. 169であると述べ、「『タラ』は自然談話では最も多く使われている。・・・（途中省略）・・・個別的な事態を述べるときに使われる」p. 169と述べているのであるが、これは「事実的条件」も含めたすべての用法をみた上での結論であるため、すでにあるできごとを描写する際における「～と」形式と「～たら」形式の選択は、話しことばであるか、書きことばであるかという点の違いしかみえてこない。

本稿では、蓮沼昭子（1993）や中島悦子（2007）の分析・指摘を認めた上で、より詳細にテキストへの現れかたを分析する。現れるテキストが異なるということは、「～と」形式と「～たら」形式に何らかの違いがあるためだと考えられるが、今回は「～と」形式と「～たら」形式の選択に関してなにか関係しているのかを明らかにしたいと思う。ただし、自然談話から、分析が可能な数の用例を採集することは難しいため、小説の会話文の用例を利用することにする。

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文―すでにあるできごとを描写する用法を中心に―

4. 「～と」形式と「～たら」形式の複文と、<きっかけ>、<連続>、 <認識・発見の状況>の用法について

「～と」形式、「～たら」形式が、<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>を含め、どのような文に用いられているのか、テキストに考慮しながらみておく。

4.1. 「～と」形式を用いた複文

「～と」形式について、実際に用例を採集すると、主に<かたりのテキスト>に用いられていることがわかる。<かたりのテキスト>とは物語世界のできごとを描写するテキストである。そして、この<かたりのテキスト>において、<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>と呼ぶ用法を示す文において用いられている。(1)は<きっかけ>、(2)は<連続>、(3)は<認識・発見の状況>となる<かたりのテキスト>における用例である。<話し合いのテキスト>では<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>は、「～たら」形式が多用されるが、「～と」形式の用例も多くながある。(4)に<きっかけ>、(5)に<連続>、(6)に<認識・発見の状況>の用例を挙げる。

- (1) 富岡秀次郎が被告人席の宏に、複雑な感情をこめた視線を送って退廷した後、廷吏が廊下へ向かって

「証人、清川さん、中へ」

と呼ぶと、清川民蔵は、しっかりした歩調で法廷に入ってきた。

(事件 268)

- (2) メニューを書き終えると、典子は加賀が運び込まれた病院に電話をかけた。交通事故ではねた相手が逃げたとなれば、警察のものもいるだろうし、もう加賀の妻も駆けつけた筈だと思ったのである。(花の降る午後 204)

- (3) 夕飯前から嵐模様の大雨になった。
停電したので、早く寝た。
目がさめると、庭で犬が吠えていた。海の荒れるような雨風の音だった。 (山の音 126)
- (4) 「まだ早いし、今朝は休んだらいい」
「そろそろ動いている方がいいんです。新聞を取りに出て、冷たい風にあたると、よくなりました。女の鼻血は、心配ないって、言いますわ」 (山の音 137)
- (5) 「アメリカの話ですがね。ニュウヨク州のバッファロオとい
うところでね、バッファロオ……。一人の男が自動車事故で、
左の耳を落としてね、医者へ行ったんです。医者はいきなり表へ
飛び出して、現場に駆けつけて、血まみれの耳をさがして、拾っ
て帰ると、その耳を傷あとにくっつけたんですって。その後今ま
で、具合よくついているそうですよ」 (山の音 316)
- (6) 「去年ね、牛を解剖したんだ。」
「そう？」
「腹を裂いてみると、胃の中にはひとつかみの草しか入ってはい
なかった。僕はその草をビニールの袋に入れて家に持って帰り、
机の上に置いた。それでね、何か嫌なことがある度にその草の塊
を眺めてこんな風に考えることにしてるんだ。……」 (風の歌を
聴け 130)

次に「～と」形式が多く用いられるのは、＜反復的・習慣的なできごと＞
や＜一般的・普遍的なできごと＞のような非一回的なことがらについて述
べる場合である。(7)、(8)が＜反復的・習慣的なできごと＞、(9)、(10)
が＜一般的・普遍的なできごと＞である。それぞれの用法について、＜か
たりのテキスト＞と＜話し合いのテキスト＞の用例を挙げている。

テキストからみた「〜と」と「〜たら」の複文一すでにあるできごとを描写する用法を中心に一

(7) 保子は茶の間で、十日分ほどの新聞を膝に積み重ねて読んでいた。

おもしろいと思う記事があると、信吾に呼びかけて聞かせる。
それがたびたびなので、信吾はなま返事してから、

「日曜は保子、新聞を読むのはやめておくれよ」と言うと、けだるく寝返りした。(山の音 315)

(8) 「ぼくなんかだつて、そうですよ。雨が降ると、いろんなところがかゆくなるしな。頭とか、背中とか、足の裏とか」

「ほんとに、雨が降ると、かゆいの？」

「かゆいです」(太郎物語 84)

(9) ジャガイモは我ながら感心するほどいい色にでき上がった。

油の温度がちょっとでも低い時にジャガイモをぶちこんだりすると、決してこういう幸福な色がでない。(太郎物語 228)

(10) 「ほら、三本とも燃えたわ」

満典も真似てやってみたが、いつぞやのバシリと同じように、一本目で灰皿に落ちた。

「手品のタネは、蠟の量よ。溶ける時間もないくらい少なくすの。少ないとマッチの棒をつなげないし、多いと、火が移るまでに溶けるわ。でも多すぎると、きっとこのゲームは成立しないのね。三本のマッチを一本の蟻で固めたら、誰でも簡単に出来るもの」(海辺の扉・上 197)

<反復的・習慣的なできごと>を表わす文は、実際に過去において起こったことがらを述べたものであり、かつ、そのことがらが繰り返し起こった・起こっているということを表わした文である。このような<反復的・習慣的なできごと>や、<一般的・普遍的なできごと>を述べるためには、目の前で起こっているできごとや経験したことがらなどの個別的・一回的

できごとをそのまま写し取って述べるのではなく、それと同様のこれまでのできごととの関係において抽象化し、多回性や普遍性といったなかにとらえることが必要である。「～と」形式はこうした場合にも用いられるのであるが、一方、「～たら」形式は＜個別的・一回的なできごと＞を述べる場合にしか用いられない。また、＜反復的・習慣的なできごと＞や＜一般的・普遍的なできごと＞のような時間的な限定をうけない(非一回性の)文は、「～ば」形式を用いた文でも表わすことができるが、「～ば」形式と「～と」形式の比較については稿を改めたい。

そして、一般に、仮定条件文や反事実条件文とよばれる文にも用いられる。これらは個別的・一回的なできごとを表わす文である。仮定条件文や反事実的条件文には作中人物の推論や推測、予測が述べられるため、地の文では＜かたりのテキスト＞には現れず、＜内的独白＞部分に現れる。

「～と」形式は、＜内的独白＞において、仮定条件文や反事実的条件文に用いられている用例はほとんどない。また、＜話し合いのテキスト＞でも、仮定条件文は、ほかの形式と比較すると、「～と」形式の用例数は少ない。そして、反事実的条件文には用いられない。(11)は仮定条件文の＜内的独白＞の例、(12)は仮定条件文の＜話し合いのテキスト＞の例である。

(11) 次の日、ヨシ子と横浜へ行くことも、七月一日から磯子の自動車工場に勤めることもきまっていた。ハツ子を殺したことがわかると、それが出来なくなる。(事件 19)

(12) 「どうだか、わかりません」

宏は顔を赤くして、また下を向いた。

「どうです、そこを少しははっきり言ってみては——言いにくいのはわかるけれど、はっきり言ってくれと、きみの過失について(菊地はこの『過失』という言葉に、力を入れた) 真実がわかって来るんだがね——どうだろう。ハツ子はその時、きみにもっと積極的に、例えば、あたしといっしょに逃げよう、とでも言っ

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文—すでにあるできごとを描写する用法を中心に—
たのじゃないかね」(事件 415)

以上から、「～と」形式は、時間的な限定をうける個別的・一回的なできごとを表わす文では、話し手や作中人物の推論や推測、予測が述べられる文(仮定条件文や反事実的条件文)にはあまり用いられず⁶⁾、主にすでにあるできごとを描写する文(<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>の文)に用いられ、そして非一回的なことがらを述べる文(<反復的・習慣的なできごと>、<一般的・普遍的なできごと>の文)においても用いられる形式であるということがわかる。

4.2. 「～たら」形式を用いた複文

主節の述語に<実行文⁷⁾>をとる条件表現形式は、「～たら」形式と「～なら」形式だけであるので、主節の述語に<実行文>をとることは「～たら」形式の大きな特徴である。(13)がその用例である。

(13)「どういうふうに奇妙なの？」

「会ってみりゃ、わかるよ。それよか、荷物おいたら、庭へおいでよ。お茶を飲む時間だから」

「よし行こ。君んちの紅茶はうまいからな」(太郎物語 155)

そして、「～たら」形式は、「～と」形式が非一回的なことがらを述べる場合の文にも用いられるのに対して、基本的にそのような文には用いられない⁸⁾。

主節が<平叙文>の場合について述べていくと、主節が<平叙文>の場合、「～たら」形式が多く用いられる文は、仮定条件文と反事実的条件文である。この点は「～と」形式と大きく異なる。(14)、(15)が仮定条件文、(16)が反事実的条件文の用例である。

- (14) 「ああ、オレは定期券持って通学したいよう」

太郎は喚いた。

「いつまで経っても、テクだけ。越境組はかっこいいわア。定期券持ってさあ、定期ありゃ釣堀いくのもタダだしなア」

「高校へ行ったら、多分定期持てる」

山本正二郎は一言で片づけた。(太郎物語 9)

- (15) 「書く？」

私はびっくりして言った。

「そうなの、何かを書いているのよ。あんなに根をつめていたら、治るものも治らないわ。・・・全く、何を考えているのかしらね」(TUGUMI 206)

- (16) 「それにしてもよく乙彦に気づいたわね」

「他に大勢人がいたら、わからなかったかもしれない。でも、誰もいない坂道で正面から運命的にすれ違ったからね」

(N・P 43)

そして、従属節も主節もすでにあるできごとが述べられる<きっかけ>、<認識・発見の状況>にも用いられる。しかし、<連続>の用法に「～たら」形式を用いたものはない。<きっかけ>、<認識・発見の状況>の用法は、「～と」形式では物語世界のできごとを描写した<かたりのテキスト>に用いられていた。「～たら」形式は、<かたりのテキスト>にも用いられるが、<話し合いのテキスト>にも用いられる。どちらかというところ、<話し合いのテキスト>における場合には、「～たら」形式の方が多用され、<かたりのテキスト>では「～と」形式が多用される。(17)は「～たら」形式の<きっかけ>、(18)は「～たら」形式の<認識・発見の状況>の用例である。

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文―すでにあるできごとを描写する用法を中心に―

(17) 「耳が痛い」

竹一は、立ったままでそう言いました。

「雨に濡れたら，痛くなったよ」

自分が、見てみると、両方の耳が、ひどい耳だれでした。(人間失格 28)

(18) 「ハツ子はどっちの方角から来ましたか。よく思い出して下さい」

秀次郎は宏のものと同僚で、被告側に同情的な証人であることは、さっきからの尋問の経過にあらわれていた。有利な証言を引き出すことが出来るはずであった。

「よくおぼえてないんです。ぼく達は車をいじってました。声をかけられて、ふり返ったら，そこに立っていたんです」

(事件 261)

以上のように、主節が平叙文の場合に用いられた「～たら」形式は、仮定条件文、反事実的条件文、すでにあるできごとを描写する場合には<きっかけ>、<認識・発見の状況>を表わす文に用いられる。

4.3. <きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>の用法について

4.1、4.2からは、「～と」と「～たら」形式はすでにあるできごとを描写する場合には共通する用法をもつが、ほかの部分では共通点は少ないということがわかる。

宮部真由美 (2010) で論じたように、<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>の用法は、次のような関係にある。

- 因果関係性：あり → ・契機的な関係を表わすもの・・・A
- 因果関係性：なし → ・時間関係だけを表わすもの
 - ・ 継起的な時間関係を表わすもの・・・B
 - ・ 同時的な時間関係を表わすもの・・・C

Aが<きっかけ>、Bが<連続>、Cが<認識・発見の状況>である。これらの用法の分類には、構文的な特徴が関係している。表1に示す。<きっかけ>と<連続>を表わす文は多くの場合、従属節と主節の述語には動詞の完成相が用いられ、ひきつづき起こることがらが述べられる。多くの場合、主体の異同が、<きっかけ>か<連続>かをわける。また、<連続>を表わす文の述語の動詞は、従属節も主節も<意志動詞>であるという特徴を持つ。<認識・発見の状況>を表わす文では、従属節と主節の述語のいずれかに動詞の継続相が用いられ、二つのことがらの同時性が示される。そして、その二つのことがらが成立する場面における認識や発見という意味が現れてくる。

表1 <きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>の違い

※宮部真由美（2010）より引用、一部追加の記入あり

	因果関係性	時間関係性	主体の異同	アスペクト
契機的な関係を表わすもの <きっかけ>	あり	継起的	異なる主体	完成相+完成相
継起的な時間関係を表わすもの <連続>	なし	継起的	同一主体	完成相+完成相
同時的な時間関係を表わすもの <認識・発見の状況>	なし	同時的	異なる主体 同一主体	完成相+継続相 継続相+完成相

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文一すでにあるできごとを描写する用法を中心に—

5. <きっかけ>, <連続>, <認識・発見の状況>の用法における「～と」形式と「～たら」形式の違い

4.1, 4.2では、<かたりのテキスト>では「～と」形式が多用されており、<話し合いのテキスト>では「～たら」形式が多用されていることも確認した。ここでは、テキストをより細かくみていき、<きっかけ>, <連続>, <認識・発見の状況>の用法について、それぞれのテキストにおける「～と」形式と「～たら」形式の選択に関してなにが関係しているのか考えていきたい。

5.1. テキストとの関係

先行研究において、「～と」形式が<かたりのテキスト>に現れること、もしくは「～と」形式が用いられた文が語理的であることの指摘があるが、本稿では「～たら」形式との関係をみるため、<かたりのテキスト>の用例を三人称小説と一人称小説とにわけて、より細かく分析を行った。

<かたりのテキスト>において、「～と」形式は、三人称小説にも一人称小説にも多く用いられていた。「～たら」形式は、まず三人称小説では筆者が採集した用例には見つからなかった。一人称小説では、「～と」形式の場合と比較すると全体的に用例数は少ないが、次のような例が見つかった。(19)が<きっかけ>, (20)が<認識・発見の状況>の用例である。

(19) 「頭が痛い」

「水飲むか？」

うなずいたら 乙彦が水を持ってきてくれた。(N・P 182)

(20) かなり酔っていた。歩けない、というほどではないけれど、世の中がきらきらして見える程度には変だった。

そうやって家路をたどっていたら、乙彦に会った。狭い町だし、そういうことはよくあった。(N・P 123)

ここで<かたりのテキスト>について、三人称小説と一人称小説との違いについて述べたい。先にも述べたように、<かたりのテキスト>には物語世界のできごとが描写される。三人称小説の地の文では物語世界の外部に視点があり、例えばそれは作家の視点や神の視点と呼ばれるが、作中人物ではない視点から物語世界のことがらが描かれる。三人称小説が物語世界の外にある視点から語られるのに対して、一人称小説は物語世界に存在する人物が、自分自身が見たり聞いたりすることを語る。大抵は主人公である「私」の視点によって描写される。視点の点から三人称小説と一人称小説とを比較すると、物語世界のできごとの描写は、三人称小説のほうがより客観的な視点から描写が試みられているといえるだろう。

一方、一人称小説の<かたりのテキスト>における描写について、視点という点から考えると、書かれたものであるか口頭表現であるかという違いはあるものの、自分自身が見たり経験したりしたことを話す<話し合いのテキスト>に通ずるものがある。(21)、(22)が<話し合いのテキスト>における用例である。(21)は<きっかけ>、(22)は<認識・発見の状況>の用法である。話しことば的な終助詞「よ」や「の」がついてはいるが、一人称がすでにあるできごとを話すという点では、一人称小説の地の文と共通する。

(21) 彼はバスで駅まで行き、母に電話をかけ、

「厄介な病気じゃないってわかったら、胃の調子も急に良くなったよ」

と言った。そして、これから東京へ出て、根岸の就職の件を頼んでみるつもりだと伝えた。(海辺の扉・下 76)

(22) 「・・・庭に入ったとたんに、ほら、真っ暗だと匂いってよくわかるものでしょ？ いつもよりぞっと濃くなって新しい、土の匂いがするの。首をかしげて立ってたら、うめき声が聞こえてきたの。・・・土の中から、まさかと思って、地面に耳をあてるよ

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文一すでにあるできごとを描写する用法を中心に—
うにして、何度も何度も確かめたわ。・・・」(TUGUMI 186)

高城修三(1998)によると「小説の文体と視点は、地の文によって実現される。視点と文体をつくり出していくのが地の文であると言ってもよい」p.134とある。「地の文」や「会話文」、つまり<かたりのテキスト>や<話し合いのテキスト>とは、「文」が集まって構成された構築物である。そしてその「文」とは単語が文法的な規則に従って組み立てられた構築物である。そうした点を考えると、「地の文」らしさ、「会話文」らしさというのは、テキストに合わせて適切な単語や文法形式が選択されることで得られるものであるといえるだろう。もしくは「地の文」や「会話文」というテキストであるから、特定の単語や文法形式を用いるのであるともいえる。

ここで、「～と」形式は<かたりのテキスト>で主に用いられ、<話し合いのテキスト>ではあまり用いられず、「～たら」形式は<話し合いのテキスト>に用いられ、<かたりのテキスト>ではあまり用いらないが、一人称小説には用例がみられるという「～と」形式や「～たら」形式の用例の現れ方と、テキストを構成する単語や文法形式の選択という点、そして言語のより基本は音声言語(<話し合いのテキスト>)であることとを考えあわせると、特に、<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>の用法として用いられる「～と」形式は、<かたりのテキスト>という文体をつくり出す形式であるといってもいいだろう。

5.2. <日記のテキスト>との関係から

「～と」、「～たら」形式のテキストとの関係をさらにみるため、本稿では、<かたりのテキスト>と<話し合いのテキスト>との、おそらくは間にあるテキストであると考えられる日記体小説から用例を採集し分析を行った。一般に日記は、執筆者が見たり経験したりしたことを自分の視点から書き記したものである。日記の文が書きことば(文章体)であることや、視点という点を考えると、一人称小説の地の文に近い。

まず、『正義と微笑』の用例についてみてみたい。『正義と微笑』は、作者である太宰治がそれが出版物となることを分かった上で書いた作品で、またフィクション作品でもあるが、一人の少年の16歳から17歳の約1年半にわたる日記で構成された作品である。

『正義と微笑』から、「～ば」、「～なら」形式も含め、「～と」、「～たら」形式の用例を採集すると、「～たら」形式が最も多く採集された。つまり、これまでできごとを描写する場合、<かたりのテキスト>では「～と」形式が、<話し合いのテキスト>では「～たら」形式が用いられていたが、『正義と微笑』という<日記のテキスト>では主に「～たら」形式を用いて述べられていた。(23)が<きっかけ>、(24)が<認識・発見の状況>の用例である。

(23) 「礼！」級長の矢村が、半分泣き声で号令をかけた。六十人、静粛に起立して心からの礼をした。

「今度の試験のことは心配しないで。」と言って先生は、はじめてにっこり笑った。

「先生、さよなら！」と落第生の志田が小さい声で言ったら、それに続いて六十人の生徒が声をそろえて、

「先生、さよなら！」と一斉に叫んだ。(正義と微笑)

(24) 夜十時頃、こっそり家へ帰って、暗い玄関で靴の紐を解いていたら、ぱっと電燈がついて兄さんが出て来た。

「どうだったい？ だめか？」のんきな声である。(正義と微笑)

日記の文体は、書きことば(文章体)ではあるが、「話すように語る」ということが可能なように、<話し合いのテキスト>におけるように綴ることもできる。また、できごとを淡々と綴ることもできる。別の日記の作品であるが、作家である五木寛之が過去に自分が記した日記を集めた『日記』という作品では「～たら」形式はあまり使われておらず、できごとの描写

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文一すでにあるできごとを描写する用法を中心に—は主に「～と」形式が用いられていた。下の(25), (26)が『日記』の用例である。(25)は<きっかけ>, (26)は<認識・発見の状況>の用例である。

(25) 五、六歳くらいの女の子が、日本人がめずらしいのか近づいてくるので日本の切手をやると、はじめは恥ずかしそうにしていたが、レニングラードが近づく頃には自分のほうからいろいろ喋るようになった。ウズベクのタシケントからきたらしい。モスクワまで十二日かかったという。(日記 186)

(26) 今日学校へ行くと ソ研の鈴木君等が三十日のコンツェルトの券を売っていた。石田君と二人で前を通りかゝって何となく悪い気がしてよけて通ってしまった。(日記 134)

(25), (26)は、日記のテキストであることを知らなければ、<かたりのテキスト>であるとしても違和感はない。これは、「～と」形式を多用することで、先に「～と」形式が<かたりのテキスト>という文体をつくりだす機能があると述べたが、<かたりのテキスト>のように淡々とできごとを綴るという効果がうまれているのではないだろうか。

一方、最初に挙げた『正義と微笑』では、作者である太宰治は、進学や就職、自分の夢との間でところが揺れ動く少年が綴る日記を、<かたりのテキスト>のような視点・文体ではなく、より少年のこころを写し取るような視点・文体を採用して執筆したのではないだろうか。そして、そうした効果をうみだすために「～たら」形式が多用されているのではないだろうか。

つまり、5.1で論じた「～と」形式と「～たら」形式がどのテキストに現れているかという分析をみて、仮に「～と」形式を用いた文はかたりの(文章語的)、「～たら」形式を用いた文は会話的(口語的)であるとするなら、<日記のテキスト>というものは、「～と」形式、「～たら」形式のいずれかを選択することで、かたりの(文章語的)にも会話的(口語的)

にもなるということがいえるだろう。

5.3. すでにあるできごとを描写する場合の「～と」形式と「～たら」形式の選択に関して

5.1, 5.2により, 「～と」形式と「～たら」形式を用いてできごとを描写する場合, 「～と」, 「～たら」形式のどちらを用いるかということに関して, 視点や文体論的な点に関わっていることがわかった。こうした違いは, 実際的にはテキストの違いとして現れてきていた。上で, 高城修三(1998)が地の文は視点と文体によって作りだされると述べていることを書いたが, <かたりのテキスト>における描写は<話し合いのテキスト>と比較して, より相対化が行われ客観的な描写となっているものといえる。一方, 一般的に<話し合いのテキスト>は現象的には客観的に述べるということとは遠いところにあるものだろう。また, 先にも述べたように, 三人称小説と一人称小説とでは, 三人称小説の方がより客観的な描写が試みられている。こうした点を考慮に入れて, これらのテキストにおける「～と」, 「～たら」両形式の使用の状況や, 量的な分布の状況を見ると, どちらの形式を用いるかという選択には, <文のかたりかた>, つまり文をどのように伝えるのかというかたりかた=伝えかたの違いが関わっているといえるのではないだろうか。

具体的には次のようであるといえる。文に述べられることがら(対象的な内容)というものが, 話し手によって現実世界から切りとってこられ, 言語化されたものであるということを考えて, なにをどのように切りとってきたのか, そしてどの単語や文法を用いて言語化したのかという点において, 文は話し手による(主観的な)創造物であるという一面がある。また, こうした文を言語化する際には, 聞き手に対してどのように伝えるかということが絡んでくる。「どのように伝えるか」ということが, <文のかたりかた>と関係しているのである。本稿において, 「～と」, 「～たら」形式を用いてできごとを描写する際, 上で文は話し手による主観的な創造

テキストからみた「〜と」と「〜たら」の複文一すでにあるできごとを描写する用法を中心に一物であると述べたが、そのような文をより客観的に伝える場合に、「〜たら」形式よりも「〜と」形式が選択されるのではないかということである。このことは、上で述べたように三人称小説の〈かたりのテキスト〉、一人称小説の〈かたりのテキスト〉、〈日記のテキスト〉、〈話し合いのテキスト〉というそれぞれのテキスト（最初にあげたものほどより客観的）への「〜と」、「〜たら」形式の用いられ方からも確認できる。ただし、この「〜と」形式を用いた文が客観的であるということは、一方の「〜たら」形式を用いた文が主観的であるということではない。「〜と」形式を用いた文は「〜たら」形式のものと比較して、相対的な客観性を帯びさせる効果があるということである。

〈文のかたりにかた〉の点から、〈話し合いのテキスト〉において、「〜たら」形式ではなく、「〜と」形式を用いることによって、客観性を高めることが可能である。(27)、(28)、(29)は、「〜と」形式の〈話し合いのテキスト〉における数少ない用例である。(27)は〈きっかけ〉、(28)は〈連続〉、(29)は〈認識・発見の状況〉の例である。(28)は〈連続〉の用例であるので「〜たら」形式に言い換えることは難しいが、(27)、(29)は「〜たら」形式に言いかえても、〈文のかたりにかた〉の点以外では問題はなさそうである。

(27) (4)の再掲

「まだ早いし、今朝は休んだらいい」

「そろそろ動いている方がいいんですの。新聞を取りに出て、冷たい風にあたると、よくなりました。女の鼻血は、心配ないって、言いますわ」(山の音 137)

(28) (5)の再掲

「アメリカの話ですがね。ニュウヨク州のバッファロというところでね、バッファロオ……。一人の男が自動車事故で、左の耳を落としてね、医者へ行ったんです。医者はいきなり表へ飛

び出して、現場に駆けつけて、血まみれの耳をさがして、拾って帰ると、その耳を傷あとにくっつけたんですって。その後今まで、具合よくついているそうですよ」（山の音 316）

(29) (6)の再掲

「去年ね、牛を解剖したんだ。」

「そう？」

「腹を裂いてみると、胃の中にはひとつかみの草しか入ってはいなかった。僕はその草をビニールの袋に入れて家に持って帰り、机の上に置いた。それでね、何か嫌なことがある度にその草の塊を眺めてこんな風に考えることにしてるんだ。・・・」（風の歌を聴け 130）

(30), (31)は、典型的な<話し合いのテキスト>とはいえないかもしれないが、法廷場面における発話である。発話者は、法廷において過去のできごと（事件に関係すること）を述べている。ここでは、「～たら」形式の用例はほとんど現れず、「～と」形式が多く用いられていた。このような法廷場面で「～と」形式が用いられるのは発話の客観性を高めることと関係があるからではないか、つまり<文のかたりかた>が関係しているのではないかと考えられる。

(30) 「ハツ子さんはそのまま、そこに立って、ぼくたちの仕事を見ていました。ぼくと宏と肩を並べて、車の前へ頭を突っ込みながら、『誰だい』って聞くと、『ヨシ子の姉だ、うるさ型なんだ。これ、ないしょだよ』と言いました。よくわかりませんが、ライトバンを借りていることを、言うてはいけないという意味だとわかりましたから、・・・」（事件 255）

(31) 「相惚れだったんでしょうよ。とにかくハツ子は宏に惚れていた。女が惚れている時は目付きでわかります。宏が『みよし』

テキストからみた「〜と」と「〜たら」の複文―すでにあるできごとを描写する用法を中心に―
へ入って来ると、ハツ子の目付きがかわりましたからね

(事件 355)

5. 4. 主節の述語が非過去形となる場合について

通常、<かたりのテキスト>の述語には過去形が用いられるが、小説の<かたりのテキスト>の表現技巧として、(32)～(37)のように、主節の述語に非過去形を用いることがある。<かたりのテキスト>において、主節の述語に非過去形が用いられた用例は「〜たら」形式を使ったものはなく、「〜と」形式によるものだけであった。(32)は三人称小説の<きっかけ>、(33)は三人称小説の<連続>、(34)は三人称小説の<認識・発見の状況>、(35)は一人称小説の<きっかけ>、(36)は一人称小説の<連続>、(37)は一人称小説の<認識・発見の状況>の用例である。これらは非過去形を用いることでなんらかの表現効果をねらったものである。例えば、工藤真由美(1995)には作中人物の知覚体験性が前面化する(眼前描写性)と述べられている。すでにあるできごとを描写する文の場合、表現効果の点を除けば、非過去形を過去形にしても文の意味はかわらないだろう。

(32) 今朝出たままの、奥の蒲団が敷き放しになっている。間の襖を手早く閉めてから、手をのばして電灯のスイッチをひねると、二人はたちまち四畳半の室にしては明るすぎる百二十ワットの光を浴びる。敷居際に立った高島の姿を見て、葉子ははっとした。
(花影 129)

(33) 葉子が門を開けてから、ずっと鳴っていたベルの音がやむと、勝手口から、顔見知りの女中の首が出る。
「先生、いて？」と笑いかけながら、近寄って行く。(花影 25)

(34) 眠ってしまったらしく、清水がいつ帰ったのか、知らなかった。目を覚ますと、長襦袢のまま寝ている。窓に日が当たり、いつものように、隣の小学校からあがる子どもの声が、潮騒のよう

に聞こえる。(花影 80)

(35) 俘虜となって辛うじて病院に收容された軍人から聞く第一声としてはこれはかなり変な嘆きである。私が「何をとられたんですか」と聞き返すと、「鞆も時計もみんなとられちゃったよ」と答える。私は吹き出したくなるのをやっと堪えたが、私のこの衝動を説明するためには少し遡って語らねばならぬ。(俘虜記 112)

(36) 夏の初の気持の好い夕方である。神田の通りを歩く。古本屋の前に来ると、僕は足を留めて覗く。古賀は一しよに覗く。その頃は、日本人の詩集なんぞは一冊五銭位で買われたものだ。

(キタ・セクスアリス 53)

(37) 黒人も私も曖昧に笑って通りすぎる。

「よく働いてる」と私はいう。黒人は微笑む。

テントに帰ると 隊長が大きな黒人と二人つまらなそうに坐っている。他の俘虜は休憩時間を終えたらしい。黒人は居眠りをしている。(俘虜記 301)

先にも述べたように、主節の述語が非過去形となるものは、<かたりのテキスト>においては「～たら」形式を使った文にはなかった。しかし、<話し合いのテキスト>には「～たら」形式の用例もあった。話し手の直接体験したことがらを目の前で起こっているかのように話す歴史的現在用法と呼ばれるものである。(38)、(39)の用例である。

(38) 「一年中、窓越しに海を見てさ。朝はちょっと早く起きるけどね。海へ出てた村の人が、やがてとれた魚を魚友に売りに来るのさ。それを買い上げながら、朝食さ」

「ふうん」

「何を食べていると思う？ いつか僕が見たら、さといもの味噌汁に鰻のたたきなんか食べてるんだ」(太郎物語 158)

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文一すでにあるできごとを描写する用法を中心に—

(39)「山本君って、いつも、楽しいように楽しいように考えてくれるのね」

五月さんはもう一度涙ぐみそうになったが、それを泳えるのに成功したようだった。

「実はね、さっき、私がちよつと有尺のお菜を買いに出て、帰ってきてみたら、ガスの臭いがしてるの」

五月さんは囁くような、小声で言った。(太郎物語 72)

<かたりのテキスト>の眼前描写性も、<話し合いのテキスト>の歴史的現在用法も、用いられるテキストの違いはあれ、よく似た表現技巧のひとつである。しかし、同じような効果であるとしても、「～たら」形式は<かたりのテキスト>の眼前描写性に用いられてはいなかった。先に見てきたように、「～たら」形式は<かたりのテキスト>にはあまり用いられない形式であった。一方で、そのために非過去形の用例が採集できなかったということもあるかもしれないが、もし、<かたりのテキスト>で「～たら」形式を用いることにより、<話し合いのテキスト>における使用のような話し手の直接体験したことがらを目の前で起こっているかのように話す歴史的現在用法のような用い方になるとしたら、先に論じた<文のかたりかた>が関係しており、客観性を保持しようとする<かたりのテキスト>と相反するためではないだろうか。

さらに、<話し合いのテキスト>における主節の述語が非過去形となっている「～たら」形式の用例について考えていく。<話し合いのテキスト>では、主節の述語が非過去形の用例に<きっかけ>はなく、<認識・発見の状況>の用法だけ採集された(※「～たら」形式は<連続>には用いられない)。先に挙げた(38)、(39)は、主節の述語が非過去形でも過去形の場合と同様に、従属節も主節も過去のことがらについて述べられており、文では過去の時点での認識や発見が述べられている。<認識・発見の状況>を表わす文は、従属節と主節の二つのことがらの組み合わせにより(構文

的な特徴も関与している), 認識や発見という意味が現れてくるものであるが, 歴史的現在用法は, このような話し手の認識や発見をよりいきいきと伝える効果と関係しているのではないだろうか。

一方, <話し合いのテキスト>における「〜と」形式は, もともと「〜と」形式が<話し合いのテキスト>にあまり用いられないこととの関係があると考えられるが, ほとんど採集されなかった。この点は, <かたりのテキスト>という文体をつくり出す「〜と」形式と歴史的現在用法という用いられ方が相いれないということが要因であると考えられる。(40), (41)は<連続>の用法であるため, 「〜たら」形式では表わすことができず, 「〜と」形式が用いられていると思われる。

(40) 「魚友が飯食つてると, 窓の外に波の音が聞こえてらあ。飯が終わると, 彼はそれから一っ走り市場にでかける」

「出荷するんだね」(太郎物語 158)

(41) 「昨日は実に愉快だったよ」

「何だ」

「おじの年賀に呼ばれて行ったのだ。そうすると, 芸者やお酌が大勢来ていて, まだ外のお客が集まらないので, 遊んでいた。そのうちのお酌が一人, 僕に一しょに行って庭を見せてくれると云うだろう。僕はそいつを連れて庭へ行った。池の縁を廻って築山の処へ行くと, 黙って僕の手を握るのだ。それから手を引いて歩いた。愉快だったよ」(キタ・セクスアリス 42)

6. まとめ

「〜と」, 「〜たら」形式は, <きっかけ>, <連続>, <認識・発見の状況>を表わす文に用いられる。先行研究においてすでに, 「〜と」, 「〜たら」形式の選択がテキストの違いによるものであるという指摘がされてい

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文―すでにあるできごとを描写する用法を中心に―したが、本稿ではテキストをより詳細に分析することにより、それぞれの形式がどのようにテキストにあらわれるかということと、その際の「～と」、「～たら」形式の選択に関しては<文のかたりかた>が関係していることがわかった⁹⁾。

詳しく述べていくと、<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>を表わす文において、「～と」形式は物語世界のできごとを描写する<かたりのテキスト>で主に用いられ、<話し合いのテキスト>ではあまり用いられない。一方、「～たら」形式は<話し合いのテキスト>に用いられ、<かたりのテキスト>ではあまり用いられないが、一人称小説には用例がみられた。

さらに、<日記のテキスト>を分析すると、<日記のテキスト>というものが、「～と」形式、「～たら」形式のいずれかを選択することで、かたりの(文章語的)にも会話的(口語的)にもなるということがわかり、「～と」、「～たら」形式の用法が重複する<きっかけ>、<認識・発見の状況>における「～と」形式と「～たら」形式とを使い分ける大きなポイントが、<かたりのテキスト>であるか、<話し合いのテキスト>であるかというテキストの違いと絡んで、<文のかたりかた>(かたりかた=伝えかたの違い)と関係があることがわかった。<文のかたりかた>において、「～と」形式を用いた文は、「～たら」形式の文と比較して、相対的な客観性を帯びさせる効果があるということである。ただし、これには「～たら」形式を用いた文が主観的であるということではないことをつけくわえておく。

また、特に、すでにあるできごとを描写する場合の「～と」形式は<かたりのテキスト>という文体をつくり出す形式であることを指摘した。

表2は「～と」形式と「～たら」形式の違いについて一覧にしたものである。二重罫線よりも上の部分が本稿で論じたものである。二重罫線より下の部分は本稿において直接論じたものではないが本論でふれた内容である。

表2 「～と」形式と「～たら」形式の違い

比較項目	「～と」形式	「～たら」形式	
	主に用いられるテキスト	かたりのテキスト (文章語的)	話し合いのテキスト (口語的)
＜きっかけ＞, ＜認識・発見の 状況＞の用法	＜文のかたりにかた＞	相対的な 客観性	—
	＜かたりのテキスト＞に おける主節述語が非過去 形	用いられる	—
	＜話し合いのテキスト＞ における主節述語が非過去 形	—	＜認識・発見の状 況＞に用いられる
＜連続＞の用法	ある	—	
主節の述語のタイプ	平叙文	平叙文, 実行文	
非一回的なことがらを表わす文	用いられる	△ ¹⁰⁾	
仮定条件文	△ ¹¹⁾	用いられる	
反事実的条件文	—	用いられる	

△：用いられることもある，—：用いられない

表2をみると、「～と」形式と「～たら」形式が相補的に用いられているように見える。

今後の課題としては、本稿では分析しなかった「～たら」形式が＜実行文＞に用いられる場合の分析や、仮定条件文や反事実的条件文の分析、「～たら」形式がどうして＜連続＞の用法に用いられないのかという点につい

テキストからみた「〜と」と「〜たら」の複文―すでにあるできごとを描写する用法を中心に―での分析を行い、「〜と」形式と「〜たら」形式それぞれがどのような特徴を持ち、位置づけられるのかということを考えなければならない。一方で、「〜ば」形式や「〜なら」形式の分析をすすめることはならない。「〜ば」形式、「〜なら」形式と「〜と」形式、「〜たら」形式のそれぞれとを対照させた分析も必要である。こうした分析により、さらに「〜と」、「〜たら」形式の特徴がより明確になるだろうし、4形式がどのように位置づけられるのかという点もみえてくるのではないだろうか。今後もさまざまな観点から引き続き分析を進めていきたい。

注

- 1) 1993年ごろまでの条件表現の研究は、有田節子（1993）にまとめられている。1993年以降では、伊藤勲（2005）、中島悦子（2007）、有田節子（2007）、前田直子（2009）などが挙げられる。
- 2) 前田直子（2009）では、用例は多くないが「〜ば」形式も<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>を表わす文に用いられると述べられている。下記の用例は、上から、前田直子（2009）の「連続」、「きっかけ」、「発見（※本稿の認識・発見の状況にあたる）」の用例である。（※下線も前田直子（2009）による）
 - ◇ 「貰う気がないんじゃないんだろ」そう訊かれれば、「ええ、そんなことはないです」と答えるしかなかった。（夫婦の情景 ※前田直子（2009）p.92より引用）
 - ◇ 中でも、義経役の東山の好演が注目される。弁慶役で共演の松方弘樹は「ずしげな目元が時代劇向き。新しい時代劇役者の誕生」と期待すれば、本人も「時代劇はぜひやりたかった。今後の活動は、芝居にも力を入れたい」と乗り気だ。（朝日新聞 ※前田直子（2009）p.93より引用）
 - ◇ それでも暗い海面に目を移せば、やはり船はすべるように進んでおり、泡立つ白波の間にちかちかと夜光虫が燐光をちりばめている。（どくとるマンボウ航海記 ※前田直子（2009）p.93より引用）前田直子（2009）は、こうした「〜ば」形式が用いられた文について「文体的には多少古さが感じられる」と述べている。本稿では、こうした用例はあまり採集されず分類も進んでいないため、現時点では「〜ば」形式の用例の扱いは保留にしておく。
- 3) 宮部真由美（2010）でも述べたが、否定形には独自の意味が読み取れる。例えば、「〜しないと」の場合は、「否定的に（できごとの的にマイナスとなるように

なことを)言うことで、相手にそうしないように(それとは違うことをするよ
うに)といった喚起をうながす」という含意が読み取れる。

◇ 「この風なら、頑張れば、やっつけやれないことはない」

宮村はそういって、雪の穴から立上がった。一昼夜の間に宮村はす
っかり弱っていて、とてもこの風では無理だし、時間的にも不可能に
考えられた。

「槍の穂に登るのは無理だ。だが、ビバークの位置を変えないと、
このままでは凍え死んでしまう」

加藤はそういって立上がった。どこか岩のかげの吹きだまりにでも
雪洞を掘って風をさけようと思った。二人はザイルを組んだ。加藤が
先に立った。(孤高の人)

◇ 子供たちが柔順に彼女の命令に服し、嫌な顔一つしないところは、
全く雪枝という娘の持っている人徳の力であるらしかった。

「さあ、みんな、雑巾をしぼって、きれいに勝手の横の陽当たりに
干したら、遅れないように学校へ行きなさい。ぼやぼやしては駄
目よ」

使っただけ使うと、雪枝は子供たちを解放し、鮎太に、

「あんたも早く学校に行かないと、遅くなるわよ」

と言った。(あすなる物語)

また、従属節が<未定のことがら>について述べられる場合、「～すると」よ
りも「～しないと」の用例の方が多く採集されている。

蓮沼昭子(1987)では、「～しなければ」の場合、合わせ文が「必要性」や「義
務」を表わすモダリティ表現に近づくことと述べられている。こうした点などか
ら、否定形の条件形について取り立てて分析を行いたいと思う。

- 4) 本稿では下記に挙げるような従属句化して状況語的な用いられ方をしているも
の、後置詞化しているもの、陳述副詞化しているものなどは、ひとまず分析の
対象から外している。これらに関しては、先行研究においても研究が進んでい
ない箇所もあり、この部分に関する分析と分類は今後の課題である。

まず、豊田豊子(1979)は、「～と」の用法に「時」があるとする。

◇ 夜になると、雨が降り始めた。(※豊田豊子(1979)より引用)

上の例の従属節は主語をとることができずに従属句化してしまっている。高
橋太郎(2003)では「条件形の動詞が主語を伴わず、句としてつかわれて、状
況語になることがある」p.250と述べ、「春になると、こおりがとける。／五時
になったら、みんなかえります。」の用例を挙げている。本稿では、豊田豊子
(1979)や高橋太郎(2003)のような例は、今回の分析からは外した。

また、高橋太郎(2003)では、動詞の条件形であるものが「動詞が動作主体
をうしなつて、運動的なカテゴリーをなくし、具体的な意味をすてて、文法的
な意味を手に入れて後置詞になる」p.274ことについて述べ、後置詞化したもの
についてどのようなはたらきをするのか分類がされている。次の用例のうち、

テキストからみた「～と」と「～たら」の複文一すでにあるできごとを描写する用法を中心に—
上の二つは「たちばのえらびだし」、三つめは「比較基準の設定」に分類されるものである。

- ◇ 「あら、きれいに入ってるじゃないの」
「うちのおふくろに言わせると、その場で、めいめいが好みの味つ
けと量で合わせて食べた方がいいって言うんだけど、これじゃサン
ドイッチじゃないよなあ」(太郎物語 88)
- ◇ 「ねえ、ねえ、お父さん。お父さんはつまり、藤原んちなどから見
ると、半失業者だと思われているのよ」(太郎物語 171)
- ◇ 信吾はうなずいて、
「千年にしても五万年にしても、蓮の実の生命は長いものだね。人間の
寿命にくらべると、植物の種子は、ほとんど永遠の生命だな。」と言
いながら菊子を見た。(山の音 291)

下の例は、高橋太郎(2003)は条件形から転成した副詞であると述べる。そ
して、「条件形から転成した副詞は陳述副詞が中心である。」p.278と述べている。

- ◇ 「悪い事をした。怒って出たから妻は嘸心配をしてゐるだろう。考
へると女は可哀さうなものですね。私の妻などは私より外に丸で頼りに
するものがないんだから」

先生の言葉は一寸其所で途切れたが、別に私の返事を期待する様子も
なく、すぐ其続きへ移つて行つた。(こころ 27)

こうした例も今回の分析からは外した。

- 5) 宮部真由美(2010)では、<地の文>を、「物語世界のできごと描写」と「作中人物の内的独白」とにわけずにひとまとめにし、<かたりのテキスト>として分析を進めた。「～と」、「～たら」、「～ば」、「～なら」形式における分析の観点を取りだす際には影響がなかったためである。しかし、本稿の「～と」形式と「～たら」形式の分析においては、用例の分布が「物語世界のできごと描写」の部分と「作中人物の内的独白」の部分とでは異なっており、このテキストの違いが「～と」形式と「～たら」形式の違いに関わると考えたため、宮部真由美(2010)の<かたりのテキスト>から<内的独白>を取りだし、典型的なかたりにある「物語世界のできごと描写」の部分をかたりのテキストと呼び、地の文をかたりのテキストと<内的独白>にわけて分析することにした。
- 6) このような「～と」形式が用いられる文の特徴から、先行研究において「～と」形式の特殊性について述べているものもある。奥田靖雄(1986)では『『すると』のかたちをとるつきそい文は、ふつうは、一回きりの具体的な動作をさしだしているが、それが反復的な動作をさしだすようになると、この「すると」は「すれば」にとりかえることができるようになる。たぶん、「すると」を動詞の条件形とみなすのは、このような事実¹に氣をとられているからなのだろう」とある。本稿も、「～と」形式が条件表現形式の一員として存在するのは、先に挙げた非一回的なことがらを表わす文に用いられ、その文においては二つのことがらの間の条件的な関係を表わすという点²が大きいからではないかと考えるが、こう

したことについては稿をあらためて論じたい。

- 7) 文の分類については宮部真由美(2010)を参照してほしいが、本稿でも文を<平叙文>と<実行文>とに分けて分析を行っている。<平叙文>は確認のモダリティ、<実行文>は話し手の積極的な態度(命令・依頼・勧誘・意志など)を表わすモダリティを持つ文である。
- 8) 「～たら」形式が用いられている文は、基本的に、時間的限定を受ける場合、つまり<個別的・一回的なできごと>を表わす文にしか用いられない。しかし、時間的限定を受けないような例もわずかであるが採集された。

◇ 《パーでもてるには、ちゃんと法則があるのだ》

父は言った。

《お金がなきゃだめなんだろう。とすればお父さんは絶望的だね。

太郎はすかさず答えた。

《金も金だが、まず、パーへ行ったら、あまり笑ったらいかないのだ》

《へえ》(太郎物語 201)

◇ 「二十年やって帰って来て、店を開いても、死ぬまで、一日も店を空けないでいることができるか？」

「一日も……。夏、釣りに行くとか……」

「ダメだね。レストランは、責任者が現場を離れたら とたんにますぐなる。そしてコックは七十になったら、もう第一線をひかなきゃいけない」

「どうして？」(太郎物語 183)

- 9) 「～と」、「～たら」形式を含む条件表現に関する代表的な研究のひとつに奥田靖雄(1986)があるが、奥田靖雄(1986)では、「～と」、「～たら」形式による複文を「契機的なつきそい・あわせ文」と呼び、一連の条件表現の中で分類を行っている。そして、「対象の立場から論理をくみだしているか、《私》の立場から論理をくみだしているか」という論理のたて方の観点から、「～と」形式は「対象の論理」、「～たら」形式は「私の論理」によるとする。奥田靖雄(1986)がこのように論じる根拠には、複文の主節に「ものがたり文」(※本稿では「平叙文」)だけでなく、「まちのぞみ文、さそいかけ文」(※本稿では「実行文」)が現れるか否かということを挙げ、それにより「《条件づける》と《条件づけられる》との関係の性質がかわってくる」ためであると述べている。奥田靖雄(1986)が述べるような主節の述語に<実行文>をとるかたらないかという観点は、仮定条件文などにおいて関わってくるものである。本稿で分析した<きっかけ>、<連続>、<認識・発見の状況>の意味を表わす文のように、すでにあるできごとを描写する文においては<文のかたりかた>が関わっていると考える。

4.3に「～と」と「～たら」形式はすでにあるできごとを描写する場合以外では共通点が少ないと述べたが、こうした仮定条件文なども含めた「～と」形式と「～たら」形式の違いに関しては今後の課題としたい。

- テキストからみた「～と」と「～たら」の複文―すでにあるできごとを描写する用法を中心に―
- 10) 「～たら」形式が用いられている用例が採集された。しかし、これは「～たら」形式を用いることでこうした意味になるのではなく、「～たら」形式が用いられている用例の意味を考えるとそうであるというものであった。
 - 11) 「～と」形式の用例は採集されたが、ほかの形式との割合を考えると非常に少なく、積極的に用いられる形式ではないと考えられる。

参考文献

- 有田節子(1993)「日本語条件文研究の変遷」 ※益岡隆志編(1993)『日本語の条件表現』くろしお出版に所収
- 有田節子(2007)『日本語条件文と時制節性』くろしお出版
- 伊藤勲(2005)『条件法研究』近代文芸社
- 奥田靖雄(1986)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文―その体系性をめぐって―」『教育国語』87, 教育科学研究会・国語部会編
- 工藤浩(1989)「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』第39号
- 工藤浩(2005)「文の機能と叙法性」『国語と国文学』82-2, 東京大学国語国文学会
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
- 言語学研究会・構文論グループ(1985a)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(一)―その1・まえがき―」『教育国語』81, 教育科学研究会・国語部会編
- 言語学研究会・構文論グループ(1985b)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(三)―その3・条件的なつきそい・あわせ文―」『教育国語』83, 教育科学研究会・国語部会編
- 国立国語研究所(1964)『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 分析』
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高城修三(1998)『小説の方法』昭和堂
- 高橋太郎(1993)『動詞 九章』ひつじ書房
- 豊田豊子(1979)「接続助詞「と」の用法と機能(Ⅲ)」『日本語学校論集』6, 東京外国語大学国語学部附属日本語学校
- 中島悦子(2007)『条件表現の研究』おうふう
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 蓮沼昭子(1993)『「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」 ※益岡隆志編(1993)『日本語の条件表現』くろしお出版に所収
- 前田直子(2009)『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 宮部真由美(2010)「現代日本語の条件文の分析のための一考察―「～と」「～たら」「～ば」「～なら」を中心に―」『文学部紀要』23-2, 文教大学

用例の出典（※本稿に引用した用例の作品のみ挙げる）

『あすなる物語』	井上靖	新潮文庫
『海辺の扉・上』	宮本輝	角川文庫
『海辺の扉・下』	宮本輝	角川文庫
『回転木馬のデッド・ヒート』	村上春樹	講談社文庫
『花影』	大岡昇平	新潮文庫
『風の歌を聴け』	村上春樹	講談社文庫
『孤高の人』	新田二郎	新潮文庫
『こころ』	夏目漱石	新潮文庫
『事件』	大岡昇平	新潮文庫
『正義と微笑』	太宰治	新潮文庫
『太郎物語』	曾野綾子	新潮文庫
『日記』	五木寛之	岩波新書
『花の降る午後』	宮本輝	角川文庫
『俘虜記』	大岡昇平	新潮文庫
『山の音』	川端康成	新潮文庫
『キタ・セクスアリス』	森鷗外	新潮文庫
『N・P』	吉本ばなな	角川文庫
『TUGUMI』	吉本ばなな	中公文庫